

体験活動を道德の時間に生かす工夫

近年、「生きる力」の核となる豊かな人間性を培う面から、子どもたちの問題行動が社会問題化している現状から、道德教育の一層の充実が求められている。

学習指導要領によれば、道德教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道德的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道德性を養うことである。道德の時間においては、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道德教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道德的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道德的実践力を育成するものとされている。

また、子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むためには、成長段階に応じて、ボランティア活動などの社会奉仕体験、自然体験、職場体験などの様々な体験活動を行うことは極めて有意義とされている。

1 「体験活動」のとらえ方【「体験活動事例集」(平成 15 年 3 月文部科学省作成)より】

「体験活動」とは、文字どおり、自分の身体を通して実地に経験する活動のことである。人は、いろいろな感覚器官を通して、外界の事物・事象に働きかけ、学んでいく。具体的には、見る（視覚）、聞く（聴覚）、味わう（味覚）、嗅ぐ（嗅覚）、触れる（触覚）といったいろいろな感覚を働かせて、あるいは組み合わせて、外界の事物や事象に働きかけ、学んでいく。このように、子どもたちが身体全体で対象に働きかけかかわっていく活動をここでは「体験活動」ととらえている。

体験活動とは、文字どおり、自分の身体を通して実地に経験する活動のことであり、子どもたちがいわば身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである。この中には、対象となる実物に実際に関わっていく「直接体験」のほか、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる「間接体験」、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ「擬似体験」があると考えられる。しかし、「間接体験」や「擬似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている。今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」である。

そして、実際の教育活動では、体験活動は教科学習においてその指導目標達成の手段として行われる。例えば、観察、実験等の類のものではなく、自然教室や

臨海学校のように、それ自体、目標や指導計画、指導体制、全体の評価計画などを持つまとまりのある教育活動を意味するものである。

体験活動は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されている。つまり、思考や実践の出発点あるいは基盤として、あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくために体験が必要であるとされている。具体的には、次のような点において効果があると考えられる。

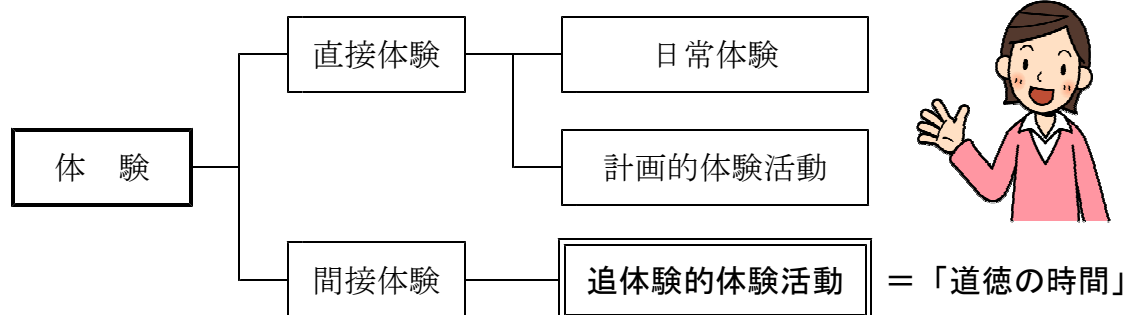
- ①現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上
- ②問題発見や問題解決能力の育成
- ③思考や理解の基盤づくり
- ④教科等の「知」の総合化と実践化
- ⑤自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得
- ⑥社会性や共に生きる力の育成
- ⑦豊かな人間性や価値観の形成
- ⑧基礎的な体力や心身の健康の保持増進



2 道徳の時間と体験活動のかかわり

具体的には、道徳の時間では、子どもたちに資料を一つの手掛かりとしながら、道徳的価値を主体的に体得させ、道徳的心情・意欲を培い、道徳的実践力を育成する場である。そのためには、資料中の登場人物の立場や行動、考え方や心の動きなどを自分のこととしてどれだけ共感できるかが重要なポイントとなる。つまり、登場人物の気持ちを追体験することによって、日常生活で自分はどうすべきかという道徳的判断力を培っていくことが大切である。

道徳教育には、次の3つの体験が必要であり、追体験的体験活動を本当に深く行うためには、子どもたち自身の「直接体験」である日常体験や計画的体験活動(ボランティア活動等)を充実させる必要がある。



3 体験活動を道徳の時間にどのように生かすか

道徳の時間は「体験を踏まえて様々な道徳的価値に気づき、その意味や大切さについて考えを深めるかなめの時間」であり、「体験活動のねらいとする道徳的価値について学習する時間」である。

道徳の時間で体験を生かそうとするとき、次の点に留意して指導の工夫を図ることが重要である。

①全教育活動との関連をとらえる

全教育活動の中で行う学校行事、見学、総合的な学習の時間、児童会・生徒会活動などでの体験を充実させ、道徳の時間では、それを手がかりに道徳的価値を深めるという形を大事にする。

②道徳的価値の自覚を深めるプロセスを大事にする

子どもたちが道徳的価値に目を向け、その自覚を深める話し合いなどがおろそかにならないようにする。

③実感的な理解を深める工夫を図る

道徳の時間での資料を通じた共感的な追求について、追体験的な学習、自己決定体験的な学習として、多様な活動を工夫し、実感的な理解が深まるように創意工夫する。

4 体験を道徳の時間に生かす様々な工夫

①体験をよりよく生かすことができる資料を活用する。

身近な出来事をと関わる資料を活用することで、子どもたちは自分のこととして直接的に考え、資料中の人物への共感もしやすい。日常の体験そのものを資料化（自作資料）することも有効である。

②日常の体験が意識できる発問を工夫する

基本的な学習指導過程を念頭に置いた場合、子どもたち一人ひとりが各自の体験を意識しながら話し合いを深めるように、次のような発問を工夫する。

【導入】

- ・ねらいにかかわる体験を掘り起こしたり、体験的な場面・状況を提示したりして、課題意識が高められるような発問をする。

【展開】

- ・各自が自己の体験に照らして資料中の主人公の行為や心情が考えられるような発問をする。（道徳的葛藤）
- ・ねらいにかかわって、各自の体験を思い起こさせ、自己の姿を見つめられる

